

小乗の中の大乘

高橋堯昭

大乘仏教はいつどのようにして出て来たのであろうか。私はガンダーラ仏のギリシャ的な美しさにひかれ、パキスタンの山寺を巡礼しながら常にこのことを考えて来た。即ち大乘仏教の成立したと思われる時代には小乗仏教の寺ばかりで大乘の寺はない。経典ばかり存在して寺のない不可思議に戸迷いながらこの幻の寺を求め歩いて来た。今回はこの問題をストゥーバとその碑銘の関連から考えて見たい。

1

釈尊の亡くなられた後、人々はこの偉大な師を思慕してストゥーバを建てて祀った。然しこれを行ったのは地方豪族等在家の人々で僧はこれにたずさわらなかつた。これは「舍利八分」の故事からも理解されよう。出家は舍利供養よりニルバーナを求める立場を優位として固執したが為である。即ち⁽²⁾

- (1) 「阿難よ汝等は舍利供養に奉仕してはならない。最高善の為に供養せよ。信心厚き刹帝利の賢者婆羅門の賢者居士の賢者ありて舍利を供養するであらう」(大般涅槃經)
 - (2) 「般涅槃に入った仏陀は火の消えたのに等しく、この仏陀が供養をうけることはない」(ミリンダ王の問い)
- と舍利供養を在俗の人々の行とした。

然し宗教的心情の常として、釈尊の遺徳思慕顕彰の爲の墳墓としての塔はやがて在家の人々に來世の「生天」の樂を与え、現世に幸福をもたらす信仰の対象と變つて行つた。墳墓から「人格的なもの」に變化したストゥーパへの信仰は飛躍的にひろがり、アシヨカピラーの建立やその八万四千の仏塔建立の伝説となつて行く。

かくてストゥーパの新設、旧塔の増巾が爆発的にのびて行く。大唐西域記のカニシカ大塔の建立の話はこれを暗示している。即ち牧童の建てた三尺の塔を覆いかくすべくカニシカ王が塔を建てると、その塔の隅に小塔が首を出す。更に覆わんとすると更に更に首を出して遂に四百八十八尺に達してようやく小塔を包むことが出来た。そこで工事成の供養を修した所、又小塔が基壇の東南隅に半分頭を出したという話。この話はタキシラのクナーラの塔の中の小塔を思わせる。アシヨカ王の王子でありながら薄幸なクナーラの供養のために建てられたこの塔。もともとサカ・バルタイ時代（前一世紀）のシルカップ東南壁の内側に建てられた高さ三メートルのこの小塔を覆いかくしていた大塔が歳月に洗われ、そのくずれ目から小塔が首を出しているからだ。かくカニシカ大塔が考古学的発掘によつて、玄奘の記録通りであつたことから、その話は作り話ではなく、仏塔信仰の隆盛化にともなつて古塔を増巾して行く様を伝えたと考えられるようになった。

この例は沢山ある、即ちサルナートのダルマラージカストゥーパ⁽¹⁾、バイシャリーの塔、スワットのプトカラの塔⁽²⁾が同心円的に何重にも増巾を重ね、マーシャルの発掘によつてサンチーの大塔⁽³⁾の中にも小ストゥーパがあることが発見された。又京都大学の発掘調査によつてタレリーの遺跡⁽⁴⁾では三つの（或はもう一つの？）塔がそのままうめられて大きな塔が作られていた。その他メハサンダ⁽⁵⁾、ナーランダ等々増巾の塔は枚挙に暇がない。

このような塔の増巾運動は後述引用の現存のデータからアシヨカ王時代既にはじまり、前一世紀の後半から後一

世紀、最盛期はクシャン盛期の二・三世紀へと、仏教の隆盛化にともなうて行われて行ったことがわかる。

[註]

- (1) サルナートのダルマラージカストゥーバがアシヨカ王柱と同じ地盤の小塔を核にして、クシャン時代に増巾されている。このことはレンガの大きさ(28.1×9.9×6.9cm)からクシャンのものとは比定され、二回目が五世紀、三回目が七世紀、四・五回目が九・十一世紀六回目が十二世紀と比定
- (2) プトカラの塔は四期にわたって増巾され、核となる塔は経五・五m、一回目が前二世紀末から前一世紀はじめまで、二回目は前一世紀から後一世紀はじめにかけて経十五・二m、三回目は四世紀前半に経十七・五m、四回目……五回目……
- (3) サンチーの大塔はマーシヤルによって、ジュンガ朝のストゥーパーの中にレンガの大きさ(41×25×7.6cm)のマウリヤ朝のレンガと一致する小塔が発見された。
- (4) タレリーは盛期クシャンから中期クシャンにかけて活躍。特にC地区塔院趾はウィーマカドフィーセスの銅貨(A D一世紀)カニンカ銅貨(A D二世紀のはじめ)フウィシユカ(A D二世紀)の模倣銅貨を出土しているからA D二世紀から三世紀に建設並びに増巾が行われたと考えられる。
- (5) メハサンダは発掘によって、主塔を増巾する時、階段両側の塔を包んで主塔を増大している。
- (6) 仏教大学として有名だが且つ又インドで最後まで残った仏教の寺であるこのナーランダは六世紀から十二世紀にかけて七期にかけて増巾をくり返し、四隅に小塔をもつ五塔式の大仏塔を完成している。

2

仏塔崇拜は在家の人達によって行われていたことは前にのべた。然し僧院側はかたくなにこれをこぼんで僧院の中に入れなかった。即ち

「僧伽を起すときは仏地と僧地を区別せよ(摩伽僧祇律)」
「塔は南にあるを得ず、西にあるを得ず、まさに東にあるべし、僧地は仏地を侵すを得ず、仏地は僧地を侵すを得ず(大衆部)」

小乗の中の大乗(高橋)

という態度も時代がたつにつれて、

「若し僧和合して四方僧地の中に塔を作ることをゆるさば作ることを得る。（薩婆多毘尼毘婆娑）」と、これを消極的ではあるが、とり入れるようになって来た。（薩婆多毘尼毘婆娑）」と、

これを現存の物証で裏付けると、前二世紀にアジャンタの石窟に仏塔が入りこみ、サンチー仏塔の奉獻者の中に比丘比丘尼が在家の人と相半ばする、否それ以上の人数の奉獻碑銘が残っている（前二世紀）から、この頃既に出家も塔崇拝に無関心でいらなくなることがわかる。

このような趨勢になると多くの僧院の中に塔が中央の中庭に安置されるようになる。例えばダルマラージカ大僧院内庭（前一世紀）、ピッバラの僧院（後一世紀）等々である。概して言えば窟院では前二世紀、野外の僧院では前一世紀ころから仏塔が僧地に入って来たと言つてよい。

かく塔崇拝が盛んとなるのは当然塔の概念、理念の変化を予想する。例えばサンチーの七世紀に建てられたチャイトヤ堂の最下層にアシヨカ王時代のチャイトヤ堂があることがマーシャルによって発見されたり、又第二タキシラのシルカップの町中にチャイトヤ堂（前一世紀）が作られて市民から崇敬されていたことが分つた。チャイトヤ堂とは塔をお堂の中に安置して祀るものである。塔が墳墓だけのものなら屋内に入れる必要はあるまい。お堂の中に入れて祀るからには墳墓以上の何かしらの「人格性・超人性」を前提する、即ち仏身観が深化して来たことが分る。

更にサンチーの東門左右石柱上に「塔門或いは欄楯を盗み、又人をして盗ましむるもの、或いはそれを他の師の寺院に移さしむるものは、殺父母・殺阿羅漢・破僧伽・（仏身の）出血の（罪に墮つべし）。かかる罪人はすべて（汚濁の中に生くべし）」（静谷目録一二七七）と彫られて居り、又これと同文のものがあと二つ発見されている。

この意味を裏返せば「塔に供養したものは父母への孝養、阿羅漢への供養となり……このけがれた世から脱して天上の楽をうける」ということを表現していることになる。即ち今までは自分の「生天」の楽をうける道だったのが、功德が更に第三者たる父母に及ぶという思想が出、又、釈尊の塔に供養することはそれが同時に阿羅漢の供養にもなる。これが拡大されると阿羅漢に止らず釈尊即他の仏という多仏思想になって行くは必然である。従って前一世紀の中頃から後半にかけては第三者たる父母兄弟から血族自分の国の人々に及び更に一切衆生という考えに及んで来る。又、前述の如く釈尊に供養することは同時に一切諸仏に及ぶという思想に必然的に発展して来る。これらの経過を現在の銘文でたどるなら、一層そのプロセスの理解は容易となるらう。

1、マトウラ出土獅子柱頭銘文「世尊の舍利を奉安し、一基の塔と一字の僧伽藍を説一切有部の所領として（寄進）、一切諸仏への供養と法への供養僧伽への供養としてサカの国への供養として」（静谷目録一七六二）（サカ国は前一世紀から後一世紀だからこの頃のものとして推定）。

2、タキシラ出土 *Paliya* 銅板銘文（マーシャルは大著タキシラの中で前七七年と比定）

「釈迦牟尼世尊の舍利を奉安し、併せて一字の僧伽藍を（造営する）（これは）一切諸仏への供養、彼の父母への供養のためであり、総督並びに彼の子と妻の寿命と力の増大を（願つてなされ）、彼のすべての兄弟血縁、一族への供養として（ささげられたものである）」（静谷目録一七八六）

3、カラワン出土銘文（後七七年に相当すると考えられるもの）

「アセスの一三四年……舍利を奉安する……国都への供養、一切衆生への供養のため（寄附された）（この福業が）涅槃の証得を（もたらさんことを）」（静谷目録一七四五）

4、ダルマラージカ大塔西側の祠堂 G 5 出土銘文（後七九年に比定さる）

「世尊の舍利が奉安された。（この舍利奉安は）大王・諸王の王・天子・クンヤーナに対する無病の賦与のために、一切諸仏への供養、もろもろの辟支仏への供養、もろもろの阿羅漢への供養のために、一切衆生への供養、友人相談役・親族・有縁の人々として（又ウラサカ）自身に対する無病の賦与を願つて（なされた）、この汝の正しき布施は（汝を）涅槃に導くであらう（静

小乗の中の大乗（高橋）

谷目録一七八八）

5、カプール西方三十マイル Warka 出土舍利靈銘文（後一七九九年に比定）

「Vagharasa 寺の内に釈迦牟尼世尊の舍利を奉安する、（願わくは）この善根によって大王・諸王の王フヴィシユカに最上の幸福が与えられ、我が父母への孝養ともなり、わが弟への供養ともなり、自身にも最上の幸福がもたらされ、一切衆生に対しては無病が賦与されんことを、更に地獄より最高の存在に至るまでのすべてのもの……更に邪信の人に對しても最上の福がもたらされんことを、この寺は大衆部の諸師の所領である（静谷目録一八〇一）（点線筆者）

6、ナガールジュナコンダ大塔石柱銘文（後三世紀）

「……過去現在未来の人々への廻向として……彼等が両方の世界（現在・未来）において利益と安樂を得んが為に、又彼女自身
が涅槃の至福を獲得できるように、又一切世界が利益と安樂を得んことを願って……」（静谷目録六六七）

自分の善行が肉親から一切衆生に及ぼされ、又(4)のようにその福行は回向されて（かえって）自らの涅槃に導く、原因と結果との間に必然性を考える思想があらわれている。これは更に徹底してて行くと「授記思想」にも通ずる思想で非常に興味深いことである。

更に後一七九九年といえは二世紀も終りに近ずいた頃には、(5)のように「地獄より最高の存在まで、否それに止らず邪信の人に対しても最高の福が」と折る、後に出て来る「悪人成仏」という大乘の思想に通ずる「より高い立場」に到達している。これは自らの善行の結果を自らに期待する立場から、他人の幸福を祈る利他の立場への移行と考えられるからである。

更に(6)の銘文の出た三世紀にもなると「過去現在未来」の思想が現れて来る。「一切衆生」も「一切諸仏」もここでは「三世十方一切の」という考え方に深化して行ったであろうことが予想される。このように前一世紀の後半に出た「一切衆生」「一切諸仏」の思想は後一世紀そして二世紀へとほんの百年余りの間に飛躍的な進展が行われて行っ

たことがこれらの銘文からうかがわれる。

然しここで問題とすべきことはこれらの碑文は大乗仏教の寺のそれではなく、小乗仏教の寺に塔や僧院を寄附した時の銘文だということである。即ち大乘の思想は小乗の寺を媒介として出て来た所に、思想と機構とのギャップという興味深い問題が示されている。

更に注意すべきことは「一切衆生の利益と安寧のために」という銘文は有部でも大衆部或は経量部でも奉獻銘中に随所に見えているが、一方の「一切諸仏への供養のため」というのは「有部の所領として」とある奉獻銘には、どうしたわけか見られない。他の部派へ奉獻されたものにはこの文字があるというのに。但し唯一の例外は碑銘(1)でとりあげたマトゥーラ獅子柱頭銘文だけである。

このことは有部教団はこの「一切諸仏」という考え方を否定したのではないかと考えられる。仏とは釈尊一仏で他の仏は彼等には認められなかったからであろう。これを裏付けるかのように、「一切諸仏」とある銘文は大衆部経量部、そして所属教団をはっきり書かないものに多い。或は平川博士のいうように所属教団のない、即ちどの部派にも属さない、比較的自由な考えをもった寺があったのか、或はこう考えてみるとこんな所に大乘仏教成立の鍵があるかも知れない。とにかく興味ある問題である。これを例証すると、

- ①「有部の所領として」奉納したものであり銘文中「一切諸仏」の文字のないもの
 - 1、カラワン (Kalawan) 出土銅板銘文 (静谷目録一七四五)
 - 2、クラム (Kram) 出土小銅塔銘文 (静谷目録一七四八)
 - 3、シャジキデリー (Shah-jiki-Dheri) 出土カニシカ舍利器 (静谷目録一七七五)
- ②「一切諸仏」の文字のあるもので「所領」のあるもの

小乗の中の大乗 (高橋)

小乗の中の大乗（高橋）

- 1、マトウーラ博物館藏菩薩坐像台座銘文「大衆部の所領として」（静谷目録六五三）
 - 2、マトウーラ出土台座銘文 「大衆部の所領として」（六一三）
 - 3、マトウーラ出土石板銘文 「正量部の所領として」（六一一）
- ②「一切諸仏」の文字があつて「所領」名のないもの
- 1、タキンラ出土パティカ銘文（前出） （静谷目録一七八六）
 - 2、タキンラ出土銀薄板卷物銘文 （静谷目録一七八八）
 - 3、マトウーラ Huvaka 寺銘文 （静谷目録 五七六）
 - 4、マトウーラ出土柱基銘文 （静谷目録 五七七）

以上のように「有部」は「一切諸仏」という言葉を使いたがらなかつたが、世の中はとうとうとして「一切諸仏」「一切衆生」という思想を使うようになった。かくこれらが一種の奉獻銘の「定形」となつていった底には大乘の思想が出現しても不自然ではない状勢となつたとも言えよう。否むしろ大乘の思想が出ていたからこそこのような銘文が出来たのかも知れない。勿論教団としてはつきりと確立したわけではなからうが。小乗の寺の中にまで銘文として入りこむような影響力をもつ状勢となつていたとも考えられる。然し組織は依然として小乗であつたことは前述の通りである。

3

然らばこの「一切諸仏」という考えはどのような経過をたどつて出て来たのであろうか。これを現存の碑銘から見ると、アシヨカ王の法勅に釈尊以外の塔のあつたことが記されている。即ちニガリー・サガールから出土したアシヨカピラーに過去七仏中の第五仏「拘那含牟尼仏」（釈尊の前が迦葉仏、その前がこの仏）について述べているから

である。即ち

天愛喜見王は龍頂十四年に拘那含牟尼仏の塔を二倍に（或は再度）増築した。又龍頂……年に自ら来て崇敬（又石柱を建立）せしめた（塚本博士アシヨカ王碑文）

と、これから見るとアシヨカ王時代には最早釈尊以外の仏が祀られていたことが分る。然もこれを裏付けるようにアシヨカ王直後、ジュンガ朝によって建てられたサンチー第塔東門のトラナーナの一番上に、ストゥーパと菩提樹が交互に七つ彫られていて過去七仏の信仰のあったことを如実に示している。

更に時代が下るから釈迦一仏が多仏化して行く前三世紀から後一世紀の間の推定の参考にはならないが、如何に過去七仏が信仰されそのストゥーパや靈跡が多数にあり、且つそれによってそれ以前を類推する為数ヶの銘文文献を参考にとりあげて見よう。（玄奘の記録はアシヨカ王柱アシヨカ塔に關しては大体正確だとこの学会の常識から重要視したい）

1、タキシラ、ジャウリヤン主塔西南の小塔から五つの銘文そのうち二つの Kasava tathagato（迦葉如来）の名。（三・四世紀）
2、マトウーラ出土仏像台座銘文に *Budhasa Kasapasa* と *asivajaya* を Friedrich Weller が "Asiatica 1954 p812" に書いてい
る。

3、法顯は仏国記に「拘薩羅（コーサラ）国に調達即ち提婆達多の衆徒がいて彼等は過去の三仏を供養して釈迦牟尼仏は拜まなかつたとある。

4、玄奘の大唐西域記に

- イ、布色羯邏伐底城……城東にストーパ過去四仏説法の所、
- ロ、憍迦国の奢羯羅故城中に一伽藍、その側に二百尺のストーパ過去四仏……
- ハ、至那僕底国、答林蘇伐那僧伽藍、……賢劫の千仏この地において天人衆を集めて深妙の法を説く
- ニ、設多凶盛国、城東三、四里ストーパ二百尺過去四仏坐及経行の遺跡
- ホ、曲女城城西に塔、其側過去四仏坐及経行遺跡

小乗の中の大乗（高橋）

小乗の中の大乗（高橋）

へ、橋貫弥国、精舎東百余歩、有過去四仏坐及經行遺跡
ト、室羅伐悉底国、大城西北六十余里有故城、是賢劫中人寿二万才時迦葉波仏本城也、南有卒堵波有迦葉波全身舍利、並無發王
所建也

とあって随所に過去四仏の塔があったことがわかる。特に「ト」は祇園精舎で名高いコーサラ国の主都舎衛城、ここが迦葉仏の本拠としてアショカ王塔まであったと記されているのは、ここから遠からぬニガリー・サガールに迦葉仏の塔の存在を示すアショカピラーの発掘と合せてこの辺が迦葉仏信仰が盛んであったことを示すと言えよう。

出土した銘文や法頭玄奘の記録から釈尊以外の塔の存在を見て来たが、玄奘や法頭は何分時代が違うから推論のため消極的な参考資料としか役立たない。従って厳密な意味ではアショカピラーとサンチー仏塔彫刻の現存資料によって、釈尊以外の塔、即ち他仏の信仰の存在はアショカ王まではさかのぼれる。然もその信仰はたかだか過去七仏以外にはひろがっていないことがわかる。

それでは他に塔はなかったらうか。現存の資料では仏の塔は存在しないが、仏弟子を祀った塔が現存している。即ち

- 1、サンチー第三塔に *maha-nogalana*（目犍連）と *Sariputa*（舍利弗）の舍利が出土して第三塔が二人の高僧の塔と分った
- 2、サンチー第二塔がアショカ王時代に仏教伝導の功勞者として十人の舍利を祀った塔と分った
- 3、アンデル第二塔が第三結集の主役 *nogaliputa* の舍利を祀った塔と分った
- 4、サトダラーの塔が *maha-nogalana*（目連）と *Sariputa*（舍利弗）の舍利塔
- 5、ビルサトープから四人のゴートイプッタの舍利
- 6、ビルサトープから目連と舍利弗の銘のある舍利

更にこのような高僧に止らず

マトゥーラ出土二・八九メートルの巨大仏像と共に出土した石板銘文（静谷六四〇）に、「九二年の冬の第一月五日 Vendra-Vihara に止住する Gramadesika 比丘の塔を造立する」とあり、
又タキシラ、モラモラドゥ僧院の一室にある立派なストゥーパはこの寺の一人の僧（或は長老）のものと言われている。

このように一般の僧の爲にも塔を建てて供養することが行われて来た。サンチーはジュンガ朝、ビルサトープも同じ頃だから、これ又アシヨカ王から少しおくれた西紀前二世紀頃から沢山の僧の塔が出来て行ったことが分る。

かくの如く釈尊の塔に過去四仏七仏の塔が加わり、更に直弟子高僧、そして一般の僧と塔が建てられて来る趨勢となった。然も釈尊追慕の爲に作られた塔は、やがて「塔イコール釈尊」然も「超能力」をそなえたものとして供養され信仰されるようになった如く、これら高僧達の塔も人間の宗教的心情から同一の傾向をたどって行ったことは容易に想像されよう。

更に考えねばならぬことは釈尊の前世物語ジャータカの成立である。釈尊の成道の原因を過去世の善行の結果と見るこの話は「捨身」の自己犠牲を随所に強調しているが、その中で注目すべきことは、羅刹と修業者の話のように前世に「法を聞く」ことが今世の悟りの原因となるという考えが出て来たことである。このことは必然的に燃灯仏等の過去仏を前提とする。然も過去一回法をきいただけでは成仏出来るわけではないから、何回も何回も生れ変って法を聞くようになる。従って過去七仏では足らずももっとも多くの仏を要請することとなる。

又これらの過去仏は時間的に縦に多数というだけではなく異った世界に一人ずついるというように横にもひろがって多仏が求められるようになる。

このように考えて来ると、「一切諸仏」の出現は 1 釈尊以外の仏の塔の出現、2 高僧達の塔の出現、3 ジャータ

カによる前世の聞法思想の成立、これによる多仏の要請等、更に加えて「仏身観」の深化ということがお互いに因となり果となつて、戟刺し合ひ、「三世十方一切」という思想に深化して行つたのであろう。（但しこれの徹底は三世紀以後のことであるが）

更にこの「一切諸仏」という言葉の出現の時期は、現存銘文から

- 1' Kosan 出土石板銘文 これは A. Ghosh が Buddhist Inscription from kausambi で書体上前一世紀としてゐる。「一切諸仏供養のために (Sava Budhanah pujaye) Ghositarana の仏陀の住所に……」（静谷目録五二九別掲）
- 2' マトゥーラ出土獅子柱頭銘文「一切諸仏の供養……サカの国への供養」（静谷一七六〇）ビューラーヤトーマス又コーノールによつてタキシラのパティカ銅板（静谷一七八六）と同時代とされている。ちなみにパティカ銅板はマーシヤルによつて前七七年と比定されていることは前に引用した。
- 3' Bimaran 出土舍利容器「……世尊の舍利に対して（古いのと）取りかえて行つた寄進、一切諸仏への供養のために (arv-abudha (ra) pujaye)」（静谷一七三〇）サカ族の王アセスの銅貨を伴出したので一般にアセス時代（前一世紀）と考えられてゐる。

前一世紀には一切諸仏が出ているから、アショカ王時代の過去四仏或は七仏から二百年もたないうちに一切諸仏になつた。これも最初は余り深い意味はなかつたろうが奉獻銘の「型」として使われるようになった。然し「型」が固定して来て一般に使われ出すと、意味内容もどんどん深化して行き、サヘト・マヘト出土菩薩像台座銘文の如く、「一切諸仏供養のため……この世のための善根と未来の善根を積む」（全く同じ型で同じ工房で作られたと思われるサルナート菩薩像の銘文がカニシカ三年とあるがこの像より少し古いと考えられ、二世紀前半）

として三世思想に近づいて行く。更にこの二世紀には燃灯仏（過去）や弥勒菩薩（未来）の像は既に作られているから、この「三世思想」に近づいて行くさまが裏付けられる。

更に「一切諸仏」の思想の深化に拍車をかけたのは仏像の成立と仏塔と仏像の関係であったと思う。

もともと塔はサンチーのように基壇の上に低い伏鉢体をのせたもので、所謂土饅重型のものであった。これに仏像図やジャータカがその基壇に彫られて行った。勿論最初は仏像なき仏像図、仏の代りに「法輪」や「菩提樹」をもつて表わしたものであったが。

やがて仏像の出現、これは「けがれた人間の姿で貴い仏を表現しない」という立場から百八十度の考え方の飛躍であった。一度この立場の転換が行われると堰を切った水のように仏像が作られるようになる。まず仏像図の中に仏の姿が、そして他と区別する為にその姿は段々大きくなって遂に単独像の成立をみる。

これはカニシカ王のコインに単独像が現れるから現実の単独像はこれより少し前の西紀後二世紀の早い時期と考えられている。

仏像が出来ると仏そのものである塔身の伏鉢体に仏像が安置されて来る、然も一つだけでなく無数の仏が。例えばタキシラ東郊マンキャラの大塔の如くベルト状に無数の仏が安置されるようになる。更に造像の勢いは基壇を二重三重にし、又塔身自体を細長く押し上げて行く、仏像仏像等々を無数に安置する為のスペースを作る必要からだ。かくて造像の盛んなガンダーラからアフガニスタンへの塔は二三世紀になると背の高い塔となつて行く。アフガニスタンのグルーダラー塔、スワットのシャンカルダール大塔、タキシラのバラの塔がその例だ。これには無数の仏がベルト状に二段三段に安置されている。更に進んで来るとその上に大きな仏龕を作り「主仏」を安置するようになる。

小乗の中の大乗（高橋）

アフガニスタンのチャリカルの西、トープダラーの大塔がその代表的なものである。これはカニシカ王の作ったと言われている塔で実際には二世紀後半から三世紀のものと言われている。

その他タクティ・バイも主塔はこの主仏を中心にした無数の仏菩薩像でうまった塔だったらしい（Percy Brown Indian Architecture は出土したミニアチャー（小横型）からこれを復元している）、又タキシラジャウリアンの無数の奉獻小塔もこれを証している。

こうなるとこの無数の仏は釈迦牟尼仏ではなく「一切の諸仏」を表わしているといってもいいだろう。特に前掲の盗難破壊を禁じたサンチーの銘文の「釈尊の塔の供養が阿羅漢の供養」、即ち釈尊イコール阿羅漢、更にこれが進展すれば当然、釈尊イコール一切の諸仏ということになる。逆に一即多は同時に多即一であるから、これらの無数の仏は釈迦一仏の顯現、釈尊の化仏という思想にも徹底して行くのではあるまいか。

こうなると、造像の気運はますます仏身觀を深めさせ、「釈尊即一切諸仏、一切諸仏即釈尊」の図式を深めて行き更に三世紀ナガールジュナコンダ銘文で「三世十方一切」へと進展して行くのも時間の問題となるであろう。

5

このように、まず釈尊の塔、そして釈尊以外の過去仏の塔、更に仏弟子長老一般の僧等の塔等造塔の気風の隆盛化、加えてジャータカ等の成立による仏身觀の深化。更に仏像の成立、然も仏塔を細長く高くして昔からの土饅重型の定型をも変容してまで行く造像の勢い、これらがお互いに刺戟し、刺戟し合いながら思想を深化させて行く、そして小乗から大乘へ移行せしめて行ったと推測する。

然し問題なのは、前にも述べたように今まで引用した塔や銘文はあくまで小乗仏教の寺に奉獻されたものだという事。思想は大乗的になつても、あくまで組織は小乗。ここに思想と組織機構のギャップがある。

然らば大乘仏教はどうして、どこをよりどころとして發展して来たのだろうか。私は今迄とりあげて来た種々の銘文や塔の意義の変容がこれを暗示しているのではないかと考える。小乗の寺の中に大乘が既に潜在していることは大乘はこのような小乗の寺を何らかの抛り所としていた。俗な言葉で言えば「庇をかりていた」という状況ではなかつたらうか。

それは僧院と塔の構成のあり方、その寺その寺の地形的な構成、それらを比較し統計的に考察せねばならない。こういう立場から私は今まで数多くの遺跡を歩いて来た。それはこの銘文から読みとれるものを物証で裏付けるといふむづかしい仕事だが。

私は次回はこの方面から小乗と大乘の問題を考えて行きたい。

参考

Percy Brown Indian Architecture

静谷静男氏 静谷目録

塚本啓 祥氏アシヨカ王碑文

ラーンシャル Taxila 及び Sanchi

京都大学調査報告 メハサンダ、タレリー

その他 デリー大学セングプタ女史のアドバイスをうく。

ラホール博物館長ダル博士

小乗の中の大乗（高橋）